

# 中国語における文成分の語序の移動について

小 林 立

## 序

現代中国語の文法では文の成分として、主語、謂語、賓語、補語、定語、状語の六つを挙げている。この他に複指成分と独立成分もあるが、上の六つの成分における語序の移動について見てゆくことにしたい。

中国語の文成分の間には一般的な語序がある。主語と謂語の間には“主+謂”，謂語と賓語の間には“謂+賓”，謂語と補語の間には“謂+補”，謂語と賓語と補語の間には“謂+補+賓”，定語と中心語、状語と中心語の間には各々“定+中心語”，“状+中心語”といった語序が見られる。

中国語の文法手段は語序と虚詞だけであり、形態変化がないから、それだけに語序は重要な意味をもっており固定的であると思われる。だが、それでも語序の移動が存在するのは事実であり、殊に口頭語においては語序は流動的であると言えるに違いない。

ところで語序の移動には二種類あって、一つは修辞上の移動であり、もう一つは文法上の移動である。修辞上の移動は意味の変化を招かぬ限り比較的自由であるわけだが、文法的意味の変化をもたらす語序の移動は、文成分の質的転化を伴うものであるから注意する必要があるのは言うまでもない。

語序の移動の方法には語序の転換だけで実現できるものと虚詞の助けを借りるものがあるが、虚詞の助けを借りることは文法的意味の変化を明示し、誤解を避けるための有効な目印になっていると言えるに違いない。

## 一、主語と謂語と補語

“主+謂”という語序は、“謂+主”という転換ができる。感嘆文とか命令文に多くみられる表現であるが、これは謂語を強調する修辭的効果が生まれるが、主語と謂語の文成分に変化は生じない。しかも語序を転換するだけで実現でき、虚詞の助けを必要としない。書面語では“謂+主”の謂語と主語の間に、読点を挿入するのが通例であるが、音声上は謂語は重読され、主語が軽読されるが発音上の停頓はほとんど認められないという。

ところが語序が一見“謂+主”と似ている表現に“現象文”と“存現文”がある。“下雨了（雨になった）”“来客人了（お客が来た）”これらの文においては“謂+主”の文の場合のように読点を入れることはできない。“来客人了”は“客人来了（お客が来た）”の主語と謂語の語序を転換したものではないからである。“客人来了”は既に話題になっていた特定のお客が来たことの表現であり、“来客人了”は突然前ぶれもなくお客が訪れたことを表現している。このような事態と認識の差が語序の転換として表現されていると考えられる。従って“現象文”と“存現文”における事物や人間の後置は、“主+謂”の語序を単純に転換したものではなく、文法的意味の変化を伴った語序の移動であると言わねばならないに違いない。

“現象文”と“存現文”が“謂+主”でないとする、“謂語+賓語”または“謂語+補語”という扱い方があるわけだが、“謂+補”とするのが適当なのではあるまいか。従ってもし文頭に場所語か時間語が置かれれば、“主+謂+補”の語序とすればよいのではないか。例えば、“我的房間住两个人（私の部屋には人が二人住める）”という文においては“我的房間”は主語、“住”は謂語、“两个人”は補語として扱えると言えるに違いない。

## 二、主語と賓語

主語と賓語は、謂語をはさんで“主+謂+賓”の語序になる。二重賓語をとる謂語は“主+謂+間接賓語（人）+直接賓語（物）”の語序になる。間接賓語（人称代詞）が直接賓語（名詞）の前におかれるのもやはり既知・特定の表現

は先行するという原則に則っているものだと言えるかもしれない。

賓語の提前は、語序による前置と虚詞の助けによる前置とがある。語序により前置される賓語の位置は文頭であるが、虚詞の助けによる前置の場合は謂語の前または文頭である。語序により前置された賓語は文の成分としては主語に転化して“主+謂”を謂語としている（“賓+“主+謂”）。虚詞（介詞）の助けにより前置された賓語は文の成分としては状語に転化していると言える（“虚+賓+主+謂”・“主+虚+賓+謂”）。

賓語が前置されると主語または状語に転化すると共に、その既知・特定という性格を強調するという修辞上の効果も伴うに違いない。疑問代詞（“誰”）または数詞（“一”）を最小の単位とする数量詞（“一个”）を定語とする賓語が謂語の前に置かれて最大または最小の範囲を示す主語になるが、普通この場合は虚詞（副詞“都”“也”）の助けを借りている（“賓+虚+謂”）。

賓語が虚詞の助けにより謂語の前におかれる場合、謂語部が複雑な表現であることが特徴になっていることが多い。従って賓語の提前によって謂語部の表現を簡潔にする修辞的、文法的効果が生まれているわけである。しかし、こうして前置された賓語をその修辞的効果を犠牲にして元の位置に還元しようとする、謂語部に還元できる場合と還元できない場合とがある。還元できない賓語は本来的文法的要請によって前置されているものと言ってよい。従って同じく賓語の提前と考えられるものでも謂語の後に還元できる修辞的な表現と謂語の後に還元できない文法的要請にもとづく表現とがあることになる。

二重賓語が二つとも既知・特定の賓語である場合、語序または虚詞の助けによって前置される賓語は直接賓語に限られ、間接賓語は動かない。これは既知・特定の性格の賓語を2つ並べることは避けようとする修辞的・文法的要請が作用していると言ってよいのかもしれない。

賓語の表現には一般的語序と前置という二通りあるわけだが、例えば“别人的衣服我不穿，我要穿我自己的（他人の衣服は私は着たくない、私は自分のものを着たい）”の文において前者は賓語の主語化、後者は一般的語序といった対照的表現をすることによって、表現効果を狙っていることが窺われると言えるに違いない。

### 三、賓語と補語

賓語と補語はいずれも謂語の補足語である。従って“謂＋賓”，“謂＋補”の語序になるが，賓語と補語の両者を謂語が伴う場合は“謂＋補＋賓”という語序になる。しかし賓語が人称代詞であれば“謂＋賓＋補”という語序の転換が見られる。これも既知・特定の表現ほど先行させる原則に則っているものだと言えるのかもしれない。

“謂＋賓”は語序だけで結合されるが，“謂＋補”は語序だけで結合する場合と謂語と補語の間に虚詞を介在させる場合とがある。従って謂語が賓語と補語を伴う場合も語序だけによって“謂＋賓＋補”または“謂＋補＋賓”の語序になる場合と虚詞の助けを借りている場合とに分かれる。しかし虚詞の助けを借りる場合は“謂＋賓＋謂＋虚詞＋補”という語序になり謂語は二度表現される。これは賓語も補語も謂語の補足語であるが，補語の表現が長く複雑になれば文の意味が分かりにくくなる恐れがある。かくて謂語を二度繰り返すことによって賓語と補語の表現を切り離すことで文の意味の分かりにくさを救う手段としていると言えるに違いない。

### 四、状語と補語

状語は謂語の前（“状＋謂”）におかれ，補語は謂語の後（“謂＋補”）におかれる。従って同一の表現が謂語を中心にして前置かそれとも後置かによって状語または補語となれる。例えば“很好（すばらしい）”と“好得很（非常にすばらしい）”，“怎么样画？（どう描くか）”と“画得怎么样？（どう描いてあるか）”，“我一把拉住他（私は彼をぐいと引きとめた）”と“我拉了他一把（私は彼を一度引っぱった）”これらは同一の表現が状語として用いられたり，補語として用いられている例である。

しかし状語と補語の表現が分化している場合もある。例えば時間語は状語と補語とでは表現が異なっている。“明天（あした）”は状語に用いるが補語には用いられない。補語としては“一天（一日）”を用いる。だが時の長さを表す“一天”はまた状語にも用いられる。従って時点を表す“明天”は状語にしか用い

られないが、時段を表す“一天”は補語にも状語にも用いられる。ただ“一天”が状語に用いられる場合には謂語は否定型かまたは何らかの補語を伴なう。この差はどこから生まれるものなのか。状語は謂語を限定、修飾する機能をもっている。従って状態・程度・方式・時間・場所などを特定する表現が多くなる。これに対して補語は状態・程度・方式・時間・場所などを謂語に補足して表現する機能をもつから一般的な不定の表現で構わない。従って状語は既知・特定の性格を帯びた表現になるのに対して、補語は一般的・不特定の性格を帯びた表現になると言えるのではないか。そのためか、“明天見(明日会いましょう)”  
とは言うが、“見明天”という言い方はしない。“謂+賓”としては可能であるが。

状語と補語の表現にも虚詞の助けを借りる場合と借りずに語序だけで結合する場合とがあるが、虚詞を用いる場合は状語の後、補語の前といった差があるばかりでなく、一般に状語または補語の表現には長く複雑な場合が多いと言ってよいだろう。

## 五、定語と状語の後置

定語は名詞の前におかれるのが通例である。数量詞、名詞、代詞、形容詞などが定語の場合は名詞の前におかれる。しかし動詞が定語の場合は名詞の後におかれる。定語が動詞の場合だけ名詞の後におかれるのは何故だろうか。“それは動詞〔句〕を修飾語として前におくと、意味があいまいになる場合が多いからだと思います。”つまり動詞または動詞句が定語になると中心語である名詞が賓語として受け取られる恐れもあるからである。“動詞+名詞”という語順が定語の語序を制約し、定語を名詞の後におかせる結果を生んでいると言える。

“存現文”の中で謂語に“有”“没有(ない)”を用いた文の場合、補語である存在、出現、消失する事物や人間に対する数量詞、形容詞などの定語は前におかれるが、定語が動詞〔句〕であるとやはり意味の誤解を避けるために事物、人間の後におかれることになる。

動詞〔句〕が定詞になると、虚詞の助けを借りる場合でも意味があいまいになり、しかも文の均整から言って定語が長くなることは避けられない。従ってやはり名詞の後におく方が意味も分かり易いし、文の体裁の上からも均整がと

れていると言える。これは動詞という定語が生み出す文法的要請による定語の後置と言えるに違いない。“我有房子住（私には住む家がある）”，“我没有菜不吃（私は食べたくない料理はない）”，“我有一本事，是朋友送的（私は友だちが贈ってくれた本が一冊ある）”，“我没有菜没吃过（私は食べたことがない料理はない）”

状語の表現の中、副詞と介詞構造は比較的自由に移動するといわれる。常用の副詞は文末におかれることさえあり、また介詞構造の状語は文末におかれる場合もあるし、文頭におかれる場合もある。しかし、これらはいずれも修辭的な語序の移動であると言ってよいだろう。

## 六、結 語

中国語における文成分の語序の転換には、語序の移動によるものと虚詞の助けを借りる移動とがある。更にいずれの場合も修辭的移動と文法的移動とに分けられる。虚詞の助けを借りる移動は文成分の文法的意味の変化をより明確に表現できる効果があると言える。従って、語序の転換のみによる場合は比較的に限られ、虚詞の助けと語序の移動が結合した転換の方がより一般的に用いられると言ってよいのではないか。

語序の移動によって文成分に文法的意味の変化をもたらす移動としては、主語と補語、主語と賓語、状語と補語の関係が挙げられ、修辭的移動としては主語と謂語の転換、状語の前置または後置が挙げられると言えるのではなからうか。

### 〈参考・引用文献〉

- 史存直 “從漢語語序看分布理論” 『語言教学与研究』一九八二年第一期。  
 陸儉明 “漢語口語句法里的易位現象” 『中国語文』一九八〇年第一期。  
 傅雨賢 “‘把’字句与‘主謂賓’句的轉換及其条件” 『語言教学与研究』一九八一年第一期。  
 劉月華 “状語与補語的比較” 『語言教学与研究』一九八二年第一期。  
 王選 “漢語的状語与‘得’後的補語和英語的状語” 『語言教学与研究』一九八四年第四期。  
 香坂順一 『中国語学の基礎知識』276頁～315頁，昭和46年11月，光生館。  
 望月八十吉・高維先 『中国語学習のポイント』44頁～70頁，87頁～91頁，113頁～119頁，214頁～219頁，昭和45年10月，光生館。  
 中国語学研究会編 『中国語学新辞典』昭和44年10月，光生館。